

予防・診断・治療と理想の街ぐるみネットワーク

「認知症国際フォーラム」開催

12月21日(日)、東京国際フォーラム(東京都千代田区)において認知症国際フォーラムが「ひとりで悩まない認知症——予防・診断・治療と理想の街ぐるみネットワーク」をメインテーマに開催され、1000名あまりの参加者を数えた。

午前の部では「認知症の診断と治療の最新情報」と題し、認知症国際フォーラム代表の川並汪一氏(日本医科大学老人病研究所所長)により認知症の概略説明が行われた後、各演者より早期発見、早期診断、治療、予防に関する現在進行形の研究内容が紹介された。脳波解析による簡便かつ安全で継続できる定期健診の可能性や、アミロイドβの蓄積状況を画像診断することによる発症前診断実現の可能性などが紹介され、なかでも田平武氏(国立長寿医療センター研究所所長)の発表は免疫系によるアミロイドβの除去を目的としたもので、前述のアミロイドイメージングと組み合わせることにより数年後の根治治療の実現が期待されるものであった。

午後のテーマは「市民による街ぐるみ認知症ケア」。まずは川崎市にある「街ぐるみ認知症相談センター」での早期発見をめざした取り組みが紹介された。センターでは認知症患者を介護する家族からの相談はもちろん、認知症が心配な人に対して無料でタッチパネルを利用したテストや脳波の測定を実施しており、「病院に行くのは気が引けるけど……」というレベルでの相談を受け入れ、疑いがある場合はかかりつけ医や専門医に連携する体制を築いている。そのほか川崎市認知



症ネットワークの劇団 SOS や福岡県大牟田市の大谷るみ子氏の取り組みが紹介され、続いて Wilhelmina Hoffman 氏(シルヴィアホーム所長)による発表が行なわれた。スウェーデンでは国立の認知症センターを通して認知症ケアの方法を地域の人々に広める取り組みが行なわれ、シルヴィアホームでその人らしさに焦点をあてた認知症緩和ケアの専門教育が実施されているという。また、ベルギーから来日した Lieve Van de Walle 氏(ヘル OPZ リハビリテーション主任)は「フォスターケアプログラム」という受け入れ家族の家に患者が入居し、家族の一員として生活を送り、その生活を医療や介護の専門家が支援するというプログラムを紹介した。

その後ディスカッションを経て、本間昭氏(東京都老人総合研究所研究部長)が「認知症本人も介護者も1人にしない」「認知症が進んでも周囲の理解とサポートがあれば普通の生活ができる」「医療体制の整備も必要である」と話を締めた。